

事  
村井靜馬著  
情  
明治  
太平記

九編

上

2504  
26-17  
14



特  
門へ遠14  
2504  
26-17

村井静馬編輯  
鮮齋永濯畫

官許

明治太平記

全

東京書林

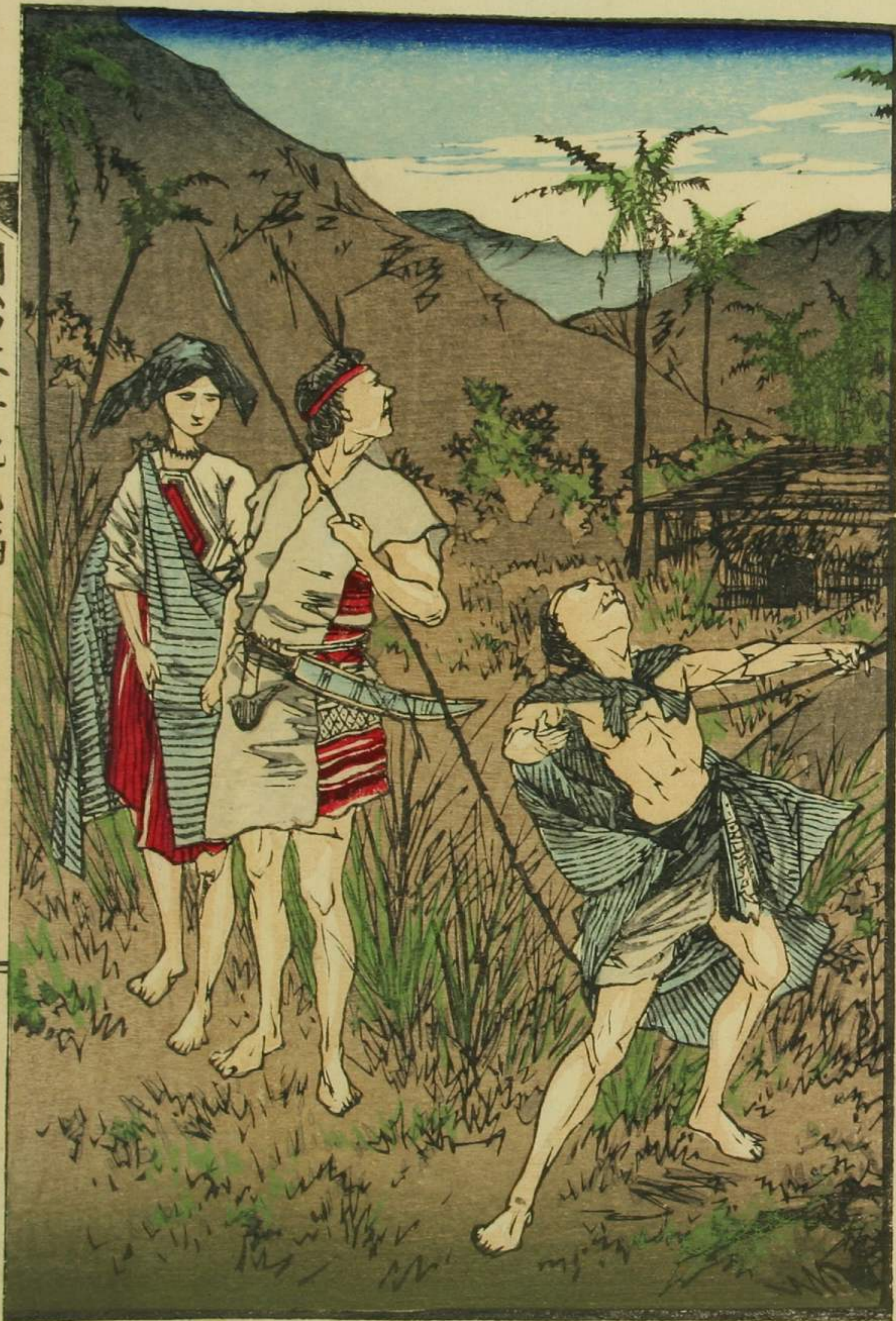
延壽堂發兌

神功皇后三韓を征し豊太閤も韓地を伐し以降王師と  
海外に臨しむる支這回臺灣の事件のみ原是孤島の  
蕃族と雖も清國表裏の言と吐きて為し兵器を動  
うり於る輒うらざら大敵あり既に全權辦理大臣  
詔を奉り支那へ渡海し至る迄本編の一段落と  
し北京の大議論より遂に渠が償金を得る愛度凱  
歌と諷ふの譯へ次の編に記載の總計十餘編を結局せん  
と見る者官編者の慮漏らば宜しと叱言らん更と請ふ

村井静馬誌

明治太平記編輯





山に生るる人



生るる人  
 蕃山  
 間  
 鳥  
 魚  
 獵  
 囟

山に生るる人

# 卷之貳

石門せきもんふ逼せまりー精兵せいへい一計いつけいの下したは牡丹ぼたん  
 族ぞく狭撃せやくふー首長しゅうちやうとさ討取うちとるふ  
 始はじめり三口さんこうの大軍たいぐん奮發ふんぱつし々蠻夷ばんい等らが  
 巢穴そうけつを獵あさるふ終おひたり

# 卷之貳

將士しやうし等ら三谷さんや族ぞく驅くる遂つひは牡丹ぼたん  
 社やしろは會合くわいごうるまきし始はじめり清國しやうこくの議論ぎろん  
 紛紜ふんえんたる故事こじの結落けつらくを定さだめんと  
 大久保おおくぼ大臣だいじん支那しなへ渡わたらるる終おひたり

## 明治太平記九編卷之一

東京

村井静馬著



再說さいせつ薩州さつしゅうの徵募ちやうぼ兵へい熊本くまもとの鎮臺ちんたい兵へい等らハ牡丹族ぼたんぞく族ぞく  
 征せいせんと險けんを凌しのぎて進すすむ程ほどハ彼石門かのせきもんの傍かたはらハ土蕃どばん等ら  
 胸壁きょうへきを築まき設しけて多人たひん數かず茲こゝハ身みを躲かくへたる首くび  
 をころし顯あはしり頻しきりハ砲たうを發はしたる彈丸だんがん雨あめの  
 如ごとくあるみぞ徵募ちやうぼ兵へい等らハ夫おつとと見みて備そなへ蠻賊ばんぞく彼所かのところ  
 在あり悉ことごとく誅戮ちゆうりやくるハ先度せんどの怨うらみハ報むかへんと

俱とも不な砲はう戦せん一いつ及およぶと雖なほも這こ方かたより一いつく打うち玉たまをこころ  
 胸むね壁かき一いつ支さへられし渠なほと傷きずつらるあ詰あはざるふ途みち嶮けん  
 一いつく且かつつ狭せまくれを逼せまりて力りき戦せん做あんとせば我わがが  
 兵へいと徒た一いつ傷きずふ支しもわらうやせんと茲こゝより乍はち一いつ策さくを  
 設しやけ鎮ちん臺たい兵へい一いつ小せう隊たいハ山やまの裏うら手てふ兵へいをまへ一いつ牡ぼ丹たん  
 族ぞくが屯とんせ一いつ後うしろの山やま一いつ攀よぢ登のぼり敵てきと直ちやう下くわし見みる一  
 つ小せう銃じゆう數すう發はつ放はなち掛かれバ思おもひがけりや支しもる故ゆゑ  
 土ど蕃ばん等ら大おほいふ駭おどろく所ところへ豫よる憤いん懣まんし堪たえざり一

薩さつ州しゅうの徵ちゆう募ぼ兵へい等らハ先せん死し争まひ進まり来きり一いつ彼かの胸むね壁かき一  
 手てとくけり攀よぢ登のぼり且かつつ躍わだり起こへ何なにも直ちやうち一いつ技わざ刀とう  
 慌あわ忙やましく野や蠻まん等らと相あ手てと撰せんまば斫きやう立たまば争まり敵てきを  
 一いつ支しと得うべき或あるは洞どう伐はきり幹くわん竹ちやく破やぶその餘よも手て疵きずを  
 負かハぬる甚しくなく一いつ散さん々ざふ討うちたされ溪せき河が又またハ岩い壁かきの  
 最さい嶮けん一いつきと飛と越こゆると宛ま然ぜん猿さるの如ごとく一いつ命いのちを  
 逃あがりきたり此この時とき土ど蕃ばんの首くびと得うる支し既すでより一いつ十二じふに級きゆうその  
 中なか一いつ牡ぼ丹たん族ぞくの酋しゆう長ちやうの首くび級きゆうなりと案あん内ない者ものより告つげし一

兵士等愉快の色を呈して稍凱陣を及びたり此日西郷  
 都督も這回英國より購ふ所の銃造船と高砂丸と  
 号して則ちあまよ乗組る臺灣港に著帆なり  
 既に我が兵牡丹族と戦争最中あり故に兵士若  
 干を上陸させし應援の用に備へ都督も尚船に  
 在りし陸地の動静を窺ふれし此とに社寮の近  
 海に支那國の軍艦二艘碇泊なりと居りしが西  
 郷の着船を見るより航る件の軍艦より四五人の士官

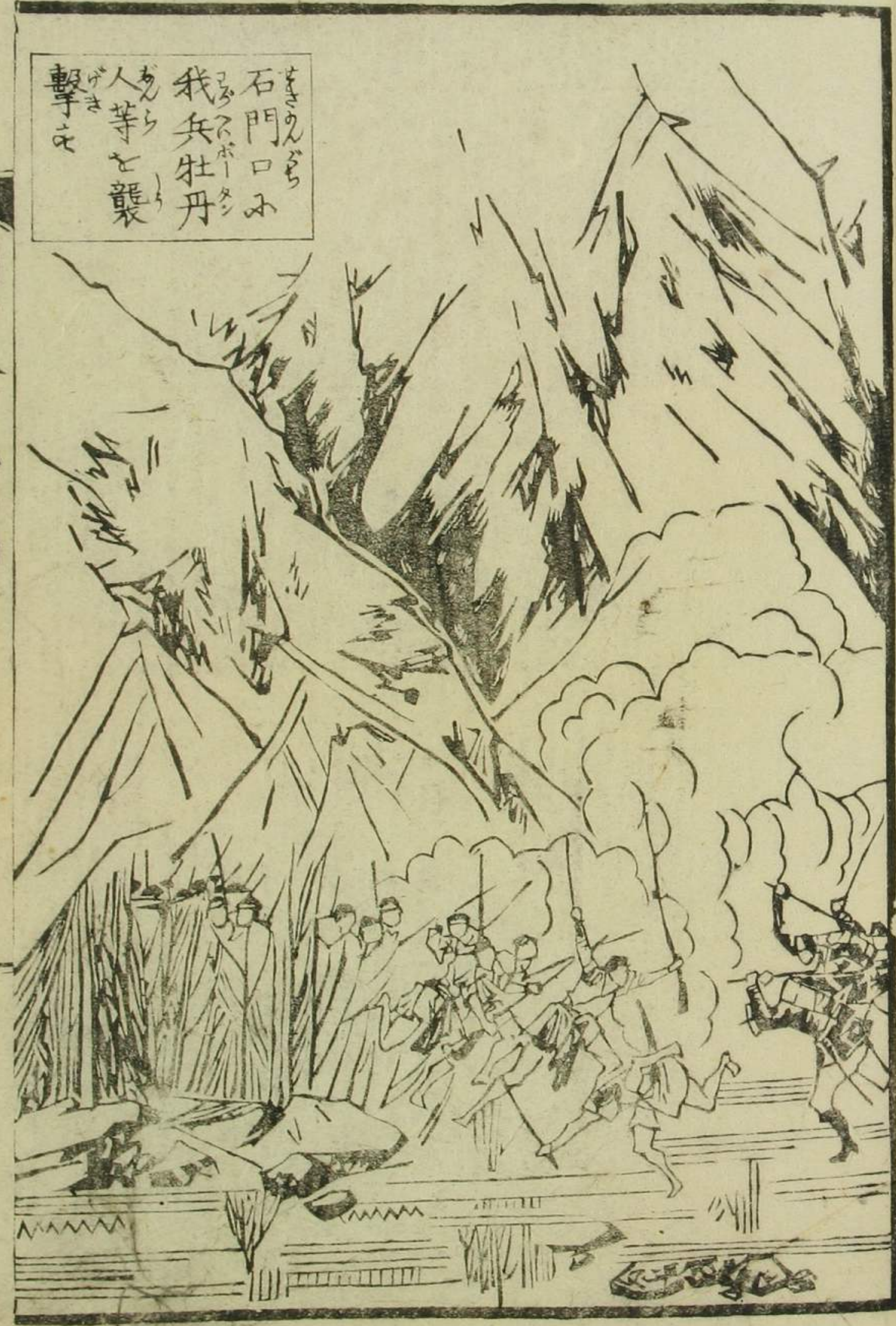
来りし都督も謁せん事を請ふ事最も頻りあり  
 うべ次の日の十二時と約し面會ふ及びしは彼士官等  
 の言へるやう卿も何等の故ありし頗る兵備を整  
 へし此地に航海ありしと詰ると都督も所聞を  
 去る辛未年明治以来我國の漂民を此島の土人等が  
 暴殺し及べる事箇様々所の為るる故に去年全權  
 大使を以て貴國の政府に談判せし臺灣東部の地は  
 於る支那の所轄しと云ふ事返答し及むし故

後来と誠めんが為問罪の師と向けたるありと事詳  
く不演説せしむ彼の士官等ハ兼伏るしけん却つる  
都督の航海せし勞を慰めなるとし辞して我が船に  
取らしむ領事件の支那船より我が日章の國旗に  
向けし祝砲を發せし故這方より之は應として報砲に  
及びし不姑くつる支那の二艦ハ此地を退帆せしり  
とぞ此支果て西郷氏ハ其附屬の將士等侶俱し稍上  
陸し及むるの彼の海岸ハ遠くぬ龜山と言へる地也

選らるる這所ハ本營を設けし之を都督府と稱ししり  
余ハ此地の土蕃等ハ廿二日の戦争に彼石門を破らし  
く牡丹の酋長を首を失ひしりと聞くより日本勢の  
勇猛を甚ど恐愕たりたるは這回都督の大軍を率  
て入港するなる為躰數門の大砲數挺の小銃鎗の穂  
先ハ宛然し秋の尾花の戦々如き隊伍張乱し  
列を正しし上陸し及びたる軍威四邊に輝き渡りし  
目と駭くをたよりあるを膽を消さるる者もなく熟蕃の



石門口小  
我兵牡丹  
人等と襲  
撃す



明治太平記九編上



明治太平記九編上

七

徒ハ言ふ及々生蕃族の其うちあも畏服あする輩ハ  
社寮の酋長「ミア」などを頼みて我軍門に降る者日々  
追て甚くは是は於て都督より参軍参謀等と列席  
して彼の降参の酋長等を廳前に呼出し形容は武備  
の嚴るを示し辭は信義の厚きを演る是非の道理  
懇ろに諭し惑ひを覺させれば何れも感涙を拭ひあ  
む我輩常に牡丹人等が暴動は苦むと雖も訴ふべき  
方なく又防ぐんあも力及む何れの時り此患ひを遣

る事のゆききりと積年艱苦を忍び居たりし神  
軍此島に航海ゆりて渠等と懲りて我々が憂苦を救  
ひ給はるる實は天助を得たるあれば不日牡丹等の巢穴へ  
御討入も在せりと多々御嚮導仕らんと異口同音に願ひ  
出たる信實面も現れり詐りありき見ゆるを則ち西  
郷都督より或は刀劍或は小銃又ハ緋縮緬の類はなど  
咸くよ之を與へて慰情を表せりと一くは渠等の  
りよく好意を感じて牛肉或は鶏など思ひくの土産を

呈上て慶意多き躰と表はせり斯の如くふ土蕃等の  
 畏服する者多しと雖も牡丹の社族等ハ廿二日の大敗  
 めも懲む尚抗まき機會あり其他山深き野蠻等の  
 降伏せざる族も少く速く賊穴を襲ひ其成功を  
 奏せんと兵士等頗りよ促まふを則ち都督府よ  
 あつて種々談判よ及むれし何れも一々を頑  
 固ふる彼の野蠻等を處置せんとい一回兵威を  
 示まよゆりむむ説諭の届くをたふりねを大

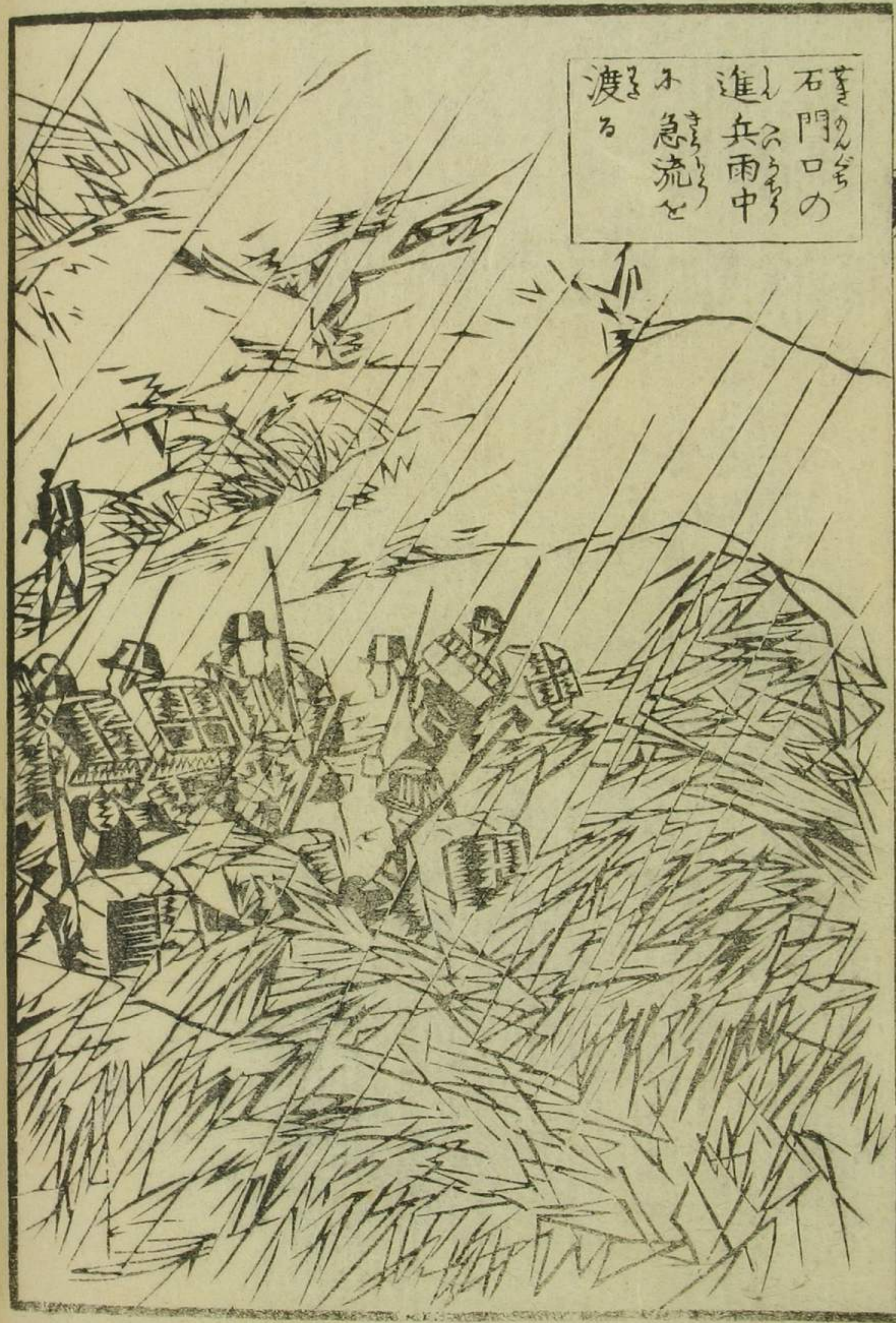
擧し山谷を獵り征まきいあまを伐し救ふまき  
 を撫助まきしとく彼の酋長の中よ於て心利たる  
 者と召し向ふ所の地理方角を豫め聞知し来る六月  
 一日と期し進撃よ及ぶべしとて總勢三千余人の  
 内十九大隊三小隊を残して本營を守らし其の兵を  
 三手よ分ち一手ハ石門口より進み一手ハ風港口より攻め  
 入り一手ハ竹社口より襲ふと三方の兵遂に合一牡丹  
 社へ押詰めべきの軍議決定し及びし其手配り

なま程ほどは既すでに五月の末まより一日毎いごとに霖雨りんう降ふり續つき  
 更さらに晴間はれまの頃ころより別わかく六月一日より篠しの々々如ごとき大雨  
 あれども此日このひを以もつて進軍しんぐんと豫よて期ごしる更さらなる故ゆゑ諸  
 口の兵士等猶豫ゆうよする体ていなく就中あんなく石門口いしもんぐちへ都督ととく自ら  
 向むかふとあるを徵募兵ちゆうぼへい二小隊ふたせうたい十九大隊じゅうくわだたい一小隊いせうたい海軍の  
 兵五十人大砲數門へいごじゅうにだっぽうすうもんと歩卒ふそは佐久間中佐等さくまなかざらと  
 と指揮しし彼かの酋長等しゆぢやうらうと嚮導者きやうどうしやとなし先隊せんたいと号  
 して進發しんぱつせし素もとより嶮岨けんじんの道みちあるのより途中とちゆうに幾筋いくすぢ

り川がはのりり常つねに流ながれぬも大雨おほいの為ために  
 水漲みづあがり甚おほく渉わたるに悩なやみ第二だいにの川がはに至いたり底そこ  
 の石いしをも轉まわるる最もも急流きゅうりゅうなる故ゆゑに衆兵しゆへいあつく手  
 と引合ひきあふと早瀬はやせを渡り越こさんとある時鎮ときちん臺兵たいへいの歩卒ふそ  
 一人過あまつて轉まわびしが之これを救すくふより忽たちまち溺死ぼくしせり  
 斯かくの如ごとくの急流きゅうりゅうと尚なほ二ふたッ程ほどうち越こへて四重溪庄しじゆうせいじやうと  
 る地ちは漸やくよしと着陣ちやくぢんせし直ただちふ斥候せきこうを遣つは  
 して其近傍そのきんぱうを探索たんさくせしと敵てきと覺おぼしむ者ものも見みへざ



月台平巴乙圖



石門口の  
進兵雨中  
急流を  
渡る

日...

左右まろろち日も暮たれば當所の民家は宿陣しつ備  
次の日の早天より徵募兵と先鋒として既よ石門まぐ攻  
寄れど三日の敗れよ懲らん這所をも支ゆる敵のつゝ孫は  
尚も山路よ今入る程よ或は我々たる断岸つゝ又ハ高草  
生茂りく何れ成道路と定めがたを辛うよと辿りつ稍  
大埔角とつろよ到り是より牡丹の巢穴までハ一里をう  
の程とつらば衆兵その身の勞と忘とて頻りハ嶮路と進  
行きハ半途よ大木と伐仆して小徑の通路と塞ぎハ

つゝ輒く進むと得ず兵士等大のハ焦燥と帶劔と  
抜く伐り拂ひ取除けんともるうちハ何時の程ふ日  
暮たまは是非なく傍の樹間よ據ておろく野陣と布  
けろぐ丹が中よ徵募兵のよ彼大木と伐除けたる此の  
虚間より潜り抜けと直ちハ牡丹社よ攻入りハ村中  
家數十餘戸のよども土蕃等ハ逃去りて人影さ人も  
見へざれば甚ど望も後失ひく思ふも似ぬ奴原と  
と舌打まれど詮なきハ丹処よ宿陣を程よ夜明と

自餘の兵隊も彼大木を取除けく漸々進み来れば  
又西郷都督も後軍の兵と率へて此地より出陣せし  
是よりと敵一人も出會わば勞して功ある心地せし  
又酋長等と召出して尚此外は牡丹の棲やると尋  
ねば是より後の山腹と南の方ある溪間に棲と設け  
し者われども其道極めく峻ありと言ふ兵士等  
听しむ先や其地より向へんとて徵募兵二分隊の案  
内者と先より立て彼の山腹へと進む程より高く茂りし

草の中より驟と伏したる蕃族より突然として砲發せし  
る二個の士卒を傷と負へり夫と見るより徵募兵等へも  
はや賊と出會ふたれと彼草中へ筒と向けく乱  
射するに雨の如く或は刀と拔持て茂りし中へ分け  
入りて四邊隈多く獵れどもや何地へ逃去りて其形  
見え見留め兵士等より憤怒し堪む尚も道あり  
岩間と傳ひく頻り進み行く程に果しと蛮夷の  
棲と覺しき三四十戸の小家あり序端より火張

放ち焼拂へども抗ふ者き其迄傍まで探索せれど  
 絶る人氣も見へざれば詮術尽るまどくと元の陣所  
 へ立飯より又南方の溪間へ十九大隊一分隊襲撃よ  
 及びふ茲ゆゑ此の家屋の何とど咸逃去り一躰ふる  
 故放火あり退けり夫の扱置き風港口へ谷参軍を  
 大将として同日本宮と進發し風港と入り地ふ至り  
 此風港の熟蕃あり其夜の茲ふ宿陣し次の日の早天よ  
 響ふ降伏させあり又彼の薩州の徴募兵と先鋒として真先よ進め谷

氏より鎮臺兵の内二小队と引卒せり是より漸次よ  
 山間よ分入るふ嶮岨をぐる所もなす殊更敷ヶ所の  
 急流の行く先々を横たわりて深き二尺ふ餘るも  
 何とを之と渡るも輒ぐるぬ或の嶺よ攀登り或ハ谷  
 より下りまどく往く度凡五六里許り遙るふ人家の連  
 なるなり這ハ爾乃社と号し牡丹族ふ劣らざる暴戾  
 の者ありし故案内者より報告し先隊の兵士  
 等大いふ勇ましく頓て件の一村落へ襲ひ蒐らんと



山岳の替  
て野蠻等  
暗く狙撃  
き

明治太平記九編上

其



明治太平記九編上

其



まろ折ろ々忽ち傍の山腹より小銃數發打掛らば  
あまが為よ案内者と小卒一個病と負ふあが借と  
那所は伏兵ありと此方も透さば砲發發し直ちよ  
是等の趣き後後軍へ報知ませしる谷少將ふも差  
置るや一小隊と山手へ廻しと敵の後ろに襲はるは  
を徵募兵等いまましく烈しく頻りよ砲を打掛々々  
彼の村落へ乱入せしむ僅ふ一個の蕃族を打仆し  
たるのふしと其餘も何処へ逃失せしる岩壁茂林の

多かれバ遂に其行く所を知らず左右をうち谷少  
將も後軍を引と進み来れば又彼の山手へ廻せし  
兵も手紙空しく来て来るあそ此夜の茲の民家よ宿  
しと尙野蠻等が夜よ乗ト襲へる更あうんと堅  
固に備へを設けしとど夫等の更もなると夜  
明る人家よ火を放ち悉く焼拂ひと頓て其地を發足  
し牡丹の方へと進しと中途中老女と少女とが終  
得ひ居たるを見付たり老女の疾くを逃去りしと少女は

更さらに逃にげもせむ忙然いそがしとて居ゐたり一隊いちたい兵士等捕とらへて  
 本營ほんえいに送り尚蕃族しやうばんぞくの棲すまやゆると道みちをぐる探索たんさくされど  
 敵一人てきひとりみも出會いであむ遂ついに牡丹社ぼたんしゃに至いたりてを介まればま  
 竹社ちくしゃ口へる吉田海軍きちだかいぐんの大尉だいう篠崎指揮長等しやしきしちやうちやうらの面々  
 徵募兵等ちやうぼへいとうを引卒ひんそつとて之これと此手このての先鋒せんぽうとて中軍ちゆうぐんを  
 福島參謀鎮臺兵等ふくしまさんぼうちんたいへいとうの隊たいを率ひきひ後軍ごぐんハ大將赤松參謀だيشやうあきまつさんぼう  
 軍近衛士官信号士官等ぐんちかゑしおんしんごうしおんしんごうら是彼附屬これかふぞくの兵士へいしを従したがへ自  
 餘よの二手ふたては一日後いちにちごとて六月二日りくごくににちは本營ほんえいを發はつし又一方またひとへ

の險路けんろは分入ぶんいりり左右とくとて彼石門かのせきもんの坂上さかの上に到いたりて  
 此手このての竹社ちくしゃ高士猾こうしわつの兩社りやうしゃを襲おそひ一其上そのうえより牡丹ぼたん  
 一寄よまざるの軍配ぐんぱいなれば頃ときて案内者あんないしやを召よして件けんの兩  
 社しゃへ攻せめ蒐くる便路びんろ奈何いかんと尋たずねれば嚮導者きやうどうしや等らハ指さ  
 ざしと左ひだりの山やまに寄よるものハ竹社ちくしゃ等らが棲すまりて右みぎ  
 ある山やまを一ひとつ隔へだて又東またひがしある山腹さんぶくに彼の高士猾かのこうしわつの  
 巢穴そうけつありと其方角そのかたかくに差示さしめせば然さらば手て近ちかき竹ちく  
 社しゃと撃うち然しかして高士猾こうしわつを襲おそへんとて左ひだりの方かたへ兵へいを

向<sup>か</sup>け難<sup>あ</sup>所<sup>と</sup>を凌<sup>あ</sup>ぎて往<sup>ゆ</sup>く程<sup>ほど</sup>は果<sup>は</sup>しと些<sup>ち</sup>の人家<sup>ど</sup>の所<sup>り</sup>れ  
 と咸<sup>みな</sup>逃<sup>に</sup>去<sup>き</sup>りと人<sup>ひと</sup>影<sup>かげ</sup>も一<sup>ひと</sup>此時<sup>このとき</sup>遙<sup>とほ</sup>くふ砲<sup>はう</sup>声<sup>こゑ</sup>の山<sup>やま</sup>は響<sup>ひび</sup>き  
 まま聞<sup>き</sup>へし一<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>の影<sup>かげ</sup>も一<sup>ひと</sup>石<sup>いし</sup>門<sup>かど</sup>口<sup>ぐち</sup>の兵<sup>へい</sup>も一<sup>ひと</sup>や牡丹<sup>ぼたん</sup>社<sup>やしろ</sup>は攻<sup>せう</sup>  
 入<sup>い</sup>りて砲<sup>はう</sup>撃<sup>げき</sup>をまてと覚<sup>おぼ</sup>へし此<sup>この</sup>手<sup>て</sup>も劣<sup>ちよ</sup>らば攻<sup>せう</sup>寄<sup>よ</sup>せん  
 と彼<sup>かの</sup>の指<sup>さし</sup>揮<sup>ち</sup>長<sup>なが</sup>たる篠<sup>しの</sup>崎<sup>さき</sup>を徴<sup>ちゆう</sup>募<sup>ぼ</sup>兵<sup>へい</sup>等<sup>ら</sup>旅<sup>りょ</sup>激<sup>げき</sup>しと  
 真<sup>ま</sup>先<sup>ま</sup>の進<sup>しん</sup>む程<sup>ほど</sup>は是<sup>これ</sup>より先<sup>ま</sup>に殊<sup>と</sup>更<sup>さら</sup>峻<sup>げん</sup>と辞<sup>ことば</sup>は  
 演<sup>えん</sup>も盡<sup>じん</sup>されざりしと往<sup>や</sup>方<sup>はた</sup>は岩<sup>い</sup>壁<sup>へき</sup>聳<sup>そび</sup>へ立<sup>た</sup>ちて宛<sup>あ</sup>然<sup>ぜん</sup>  
 路<sup>ち</sup>の絶<sup>た</sup>るが如<sup>ごと</sup>く一<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>の影<sup>かげ</sup>も一<sup>ひと</sup>爰<sup>こゝ</sup>まで辿<sup>たど</sup>り来<sup>き</sup>て引<sup>ひ</sup>返<sup>かへ</sup>す



先<sup>ま</sup>隊<sup>たい</sup>進<sup>しん</sup>む  
 險<sup>けん</sup>に  
 至<sup>いた</sup>る  
 絶<sup>た</sup>

日本文言大系  
二二  
がたやうもなると先隊の兵士等憤護りと彼の絶壁を登る夏九十丈をうりふりと僅く平地に至りて夫より道多路を索めて行く。幾許里あるべく所々小村ありと雖も出て出會者もあらず。尚兵を進む程に茲に一條の流れあり最も早瀬ありと難所は慣れし夏るとは衆多之踏込と渡り越さんとまる折しも忽ち二人の敵ありと我と窺ふ躰あると兵士等速くも見出ると蕃族彼所に見へ

たるを疾く打取ると言ふよりなやくあつく筒と差向けしゆりも砲發せざる間小賊徒等直ち身を轉へしと山手張さして逃行き其俣見へぞありしを躰と諸方へ斥候と出ると頻り小穿鑿する程に土蕃等路傍の草叢の最も深き茂み小躰れく斥候の兵の近く来るを狙ひまると砲撃せしと忽ち二個へ打殺され一個はも瘡を負り此形勢を見るよりも指揮長篠崎大いふ怒りと兵士も命とて抜刀なきめ

彼草中うらちう分入わかひらせと隈かまかく之これと獵あると雖なも渠等みちらい  
何なにとみ走りをしわ逃足にげあし甚まど疾はやくしと其影そのかげをとも見留みどめめ  
糸いとの篠崎しのざきも多おほく焦燥あせうと劇あはしく衆しゆを指揮しきし山手やまての  
方かたへと攻登せうとんしり爰こゝみ至いたりて蕃族等ばんぞくらがまま出會いふや  
否いなやの譯わけへ次つぎの巻まきよ委まかしく解とくべし

明治太平記九編卷之一終

